

## 『卅三間堂棟由来』

宝暦十年（一七六〇）に豊竹座で初演された「祇園女御九重錦」の三段目にあたる。のちに独立して「卅三間堂棟由来」の題名が定着するのは文政四年（一八二一）から。異類婚姻譚の代表的な物語であると同時に、木遣り音頭の名曲は、ある時期（戦前？）までは誰もが知る人気曲だった。

「平太郎住家の段」は、導入部の「口」を略したり、後半分の和田四郎による老母惨殺の件などをカットする場合もあるが、今回は完全版。ここ半世紀の本興行では完全版は七回目、東京では十六年ぶりとなる。

横曽根平太郎の父はかつて宮中の警護をする北面の武士だったが、朋輩に討たれて妻子は流浪。成長して父の敵討ちをめざす平太郎は、母と共に熊野権現参詣のある日、太宰の帥季仲秘蔵の鷹が柳の大木に引っかかったので柳を切り倒そうとするところに来合わせ、一矢で鷹の足縄を射切って柳を救う。実はこの一行の中の武者所時澄こそ平太郎の父の敵なのだが、多勢に無勢でその場での敵討ちは断念。その平太郎と母を慰めた柳の傍の茶店の女あるじお柳と、平太郎は結ばれることになる。実はこの柳が、かつて修験者蓮華王坊が、榎と柳が枝を交わす有様を修業の妨げとみて、切ろうとしたところ枝に貫かれて死んだという柳で、蓮華王坊の再来が白河法皇とされる。榎の木再来である平太郎と、お柳が緑丸という子をもうけて五年の後、というところから幕が開く。

都から進の蔵人が白河法皇の使者として訪問、かつて法皇を助けたお柳に褒美を賜るとのこと。蔵人は院宣を蒙っており、法皇の頭痛の病平癒のため、和歌の浦の柳を伐って、三十三間の御堂を建てるといふ。これを聞いたお柳が驚く。夫の平太郎が戻るが、悪者和田四郎が強請に来るので、母が褒美の黄金を投げ与えて帰す。平太郎が微睡む内、お柳は自身が柳の精であることを打ち明けて姿を消す。平太郎は鳥目ながらも、我が子のみどり丸と共に跡を追おうとする。その留守に和田四郎が再訪、池水の中に母を縛り上げて殺すが、孝行と信心の功德によって目が開いた平太郎によって討ち果たされる。柳の大木は街道筋を運ばれてゆくが、親子の別れを悲しんで動かなくなるので、平太郎の歌う木遣音頭にあわせて、みどり丸が引く。柳は再び動き出し、都を目指すことになる。

人ならざるものが、人と契ってしまったことによる異類婚姻譚は、作中でお柳が例に挙げるように、「芦屋道満大内鑑」の葛の葉狐が有名である。草木の精が人の姿となるのは、旅僧の夢に現れる夢幻能にはよくみられる設定。お柳の重要な告白時に、平太郎はいつも眠っているという指摘（内山美樹子氏）もある。

平太郎と我が子緑丸との別れを決意したお柳の述懐。「斧の音。伐木とう／＼てう／＼と」にあしらう三味線の音が、柳を切る音を即物的に、感覚的に伝える。宿場ひとつ離れた柳を切る音が、今日の前にいる柳の精を切るように思える感覚は、まさに語り物ならではの手法で、「枝に障りも、アレ／＼／

＼」にあしらう三味線もまた同じ。

狐詞のような際立つ特徴は目立たないものの、お柳の詞が難しいとされる。清純で哀切な情愛は、詞だけでなく「春や昔の春の頃」「散り来る柳の葉隠れや」などの曲調にもあらわれる。緑丸に対しての「ヤア、ヤア、ヤア」の泣きとウレイ、「母は今を限りにて、元の柳に返るぞや」の悲哀は、「離れ、難なや悲しや」に極まることに。

さすがに目を覚ました平太郎と緑丸の嘆きに、再び姿を現したお柳は、法皇前世の髑髏を残して、「離れ難なや可愛やなア。アレ／＼／＼」から「斧鉞がてう／＼／＼」の柳を切る音にせかされるように姿を消す。カット版だと、このあとすぐに木遣り音頭になるところ、完全版の今回は、平太郎の鳥目が明らかになり、敵役の和田四郎による平太郎の老母惨殺と、貧苦と窮状をいやまず設定が、これでもかと続く。

柳の大木を曳くための労働歌が「木遣り音頭」で、途中で柳がびくとも動かなくなる。すでに生命を絶たれたものが親子の別れを悲しむのは、たとえば「義経千本桜」で、鼓の皮となった親狐が鼓の音を止めるのにも似た局面。平太郎が音頭を取り、緑丸が曳くと不思議や大木は再び動き始める。草木でさえこの通り、ましてや人間ならば、という親子の情のありさまを見せる終幕となる。

(児玉竜一)